

馬の発育の調査からⅡ

— 競走馬になったら —

前回のこの誌面で、子馬の飼養管理が整ってくると、最終的な成馬になった時の大きさは、ほとんどが遺伝や天候など、飼養技術でない要因によって決まっていると言われるようになってきたことを紹介しました。

そこで今回は、生産地で集められたデータばかりでなく、競走馬として活躍している時のデータも集めて、検討を加えてみました。集めたデータは、誕生からの発育時のデータがある馬の、その後の競馬出走時の体重データです。

図-1は、体重の計測値を、年齢、月日を追って示したものです。例として、雄の早生まれと遅生まれを区別して示しました。1歳秋くらいから、早生まれ、遅生まれも交じり合うようになり、競走馬になると、ほとんど一様に混ざり合っています。

図-2は、生まれ時期、雌雄別に一定の時点での、体重の平均値を、図-1の上に重ね、折れ線で示しました。誕生時の平均体重は、生まれ時期によっても、ほとんど変わりありませんでしたが、1歳の夏(7月15日)では、生まれ時期による差がまだあります。それが競走馬となると、生まれ時期による平均値の差は、雄雌それぞれ、ほとんど無くなっていました。

図-1 誕生から競馬時期までの体重の変化(1)

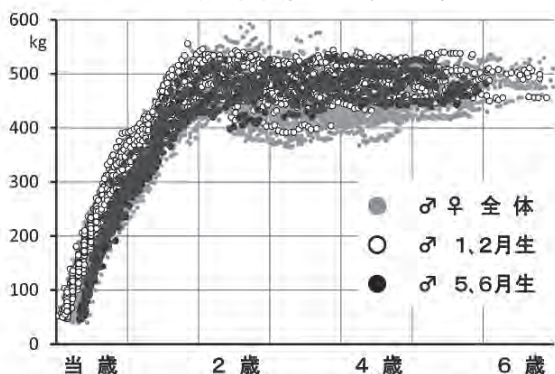


図-2での点の表示は、雌雄の区別の他に、牧場での測定値と、競馬場での測定値を区別して示しました。2歳時には、競馬場へ行かずに、体重の増え続ける馬もいますが、トレーニングの強弱の違いによるのか、多くはやや減少しているようです。そして競馬場に行き、初戦では、極端に減少している馬もいました。

体重のデータは、生産牧場で計測して頂いたも

のと、競馬情報から得た体重計測値とで、連続していない例も多いのですが、この間の変化については、馬の生活や環境も大きく変わり、引き渡し前後での関係者の苦勞が窺われます。

図-2 誕生から競馬時期までの体重の変化(2)

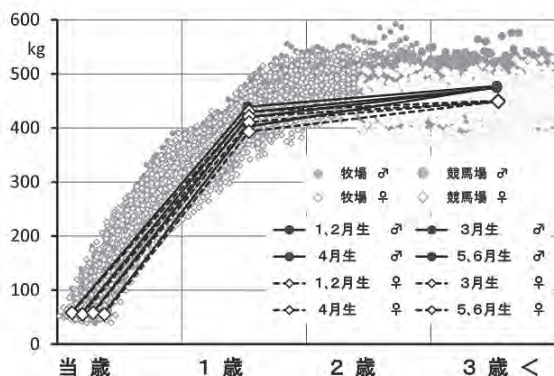
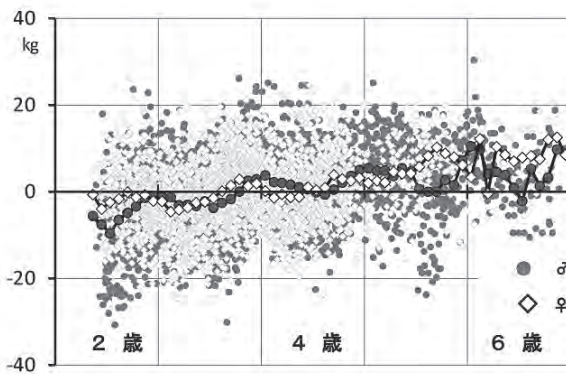


図-3は、競馬場へ行ってからの変化を、体重の増減で示したものです。体重の増減というと競走馬の場合は、前回の出走時との差を公表していますが、ここではその馬の出走時体重のすべてから、その馬の平均体重を計算し、その数値と実際の計測値との差で、増減を示しました。

図-3 競走馬の体重の増減



競走馬となっても、波はあるものの、体重は増え続けているようです。それよりも興味深いことは、その波がちょうど年周期になっていることです。競馬場では、コンディションの調整に、関係者は日々努力しているのですが、冬は絞りにくく、夏はやせてしまう、ということが窺われます。「馬肥ゆる秋」というのは真実のようですね。

それにしても、生産地(北海道)での子馬は、冬期間には成長が停まるのに、競馬場ではその逆なのは、どう考えたらよいのでしょうか。